

ナスカ展 織物を見る

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6671

ナスカ展 織物を見る

魚水 環（文学部史学科考古学専攻2年）

2007年6月21日、石川県立美術館にて催されていた「世界遺産ナスカ展 地上絵の創造者達」へ考古学実習の一環として行ってきました。本稿は、その中でも特に印象深かった織物のことを主に書いてゆきたいと思います。

紀元前100年頃から後700年頃までおよそ800年にわたって続いたナスカ文化にあって、織物は極めて重要かつ独特な位置にあったと考えられています。墓地から出土するミイラはいずれも布で丁寧に梱包されており、一部の梱包にはきわめて細緻な構造と多様な色彩を持つ織物が使われております。日用品であったとしても儀礼用の品であったとしても、埋葬という特殊な行事に使用されている以上に、それはナスカの人々が織物に意味を見出していた証左に他なりません。梱包材に使われたマント以外にも、頭飾りの布・帯・上衣など多くの織物が発見されていること、それらに見られる紋様の規則性、シンメトリーもまた、これを裏付けるものと言えるでしょう。

ナスカの織物に見られるシンメトリーは、布を織る時の色糸の動きを拡大したかのような構造になっています。「布や紐の構造それ自体がナスカの人々にとって重要な意味を持っていた（フレイム 2006 :84,15~7）」ためと解説されています。メアリ・フレイムは『繊維関連技術は、複雑で多様な世界（中略）に一定の秩序を与えるための、使い勝手の良い枠組みだったのであろう。さまざまな関係を視覚的コードによって組織

化しようとする際、誰にでも理解されうる繊維関連技術をモデルにするのが一番わかりやすかった』のではないかと続けております（フレイム 2006:211, 124~28）。これはすなわち、繊維技術を記号論的に解釈したものと捉えられましょう。つまり、ナスカの人々にとって繊維技術とは、世界（自然の世界と、社会的に構築された社会との両方、またはどちらでもない中間的な意味）の一部を切り取り、自分達の前に現出させる一種の記号的意味合いを持つものであったのではないかということです。

織物は、全ての工程に関して綿密な構想や計画の上に織り上げてゆくことのできるものです。時間的な隔たりや、民族による習俗の差異を考慮すれば、民俗的事例をそのまま参考にはできないでしょうが、現地の人々は今でも糸と機織りを自在に操り、布を余らせることなく織物を仕立ててゆく技術を身につけているといいます。ナスカの織物の精緻な構造は全くその計画性のなせるものと言えるでしょう。それによりある種の“世界”を現出させていた（のかもしれない）ナスカの織物は、それだけでも自分の考古学的情熱をかき立てるには十分なものでありました。

参考文献

メアリ・フレイム 2006 「ナスカ織物の美術と技巧」
島田泉 ドナルド・Å・ブロー 馬場悠男 篠田謙一
監修『世界遺産 ナスカ展——地上絵の創造者たち』
pp.210-218 TBS
